

札幌医科大学の創基80周年記念式典と講演会・シンポジウムが6月28日、札幌市中央区の札幌パークホテルで開かれ、大学関係者や来賓ら約300人が節目を祝いました。

同大は80年前の1945（昭和20）年に前身の北海道立女子医学専門学校が創立され、1950（昭和25）年に戦後の新制医科大学の第1号として開学しました。これまでに輩出した卒業生は、医学部は約6400人、保健医療学部は約2700人。それぞれが道内各地はもとより全国、そして世界を舞台に、医療活動や教育・保健行政などの分野で活躍しています。

ここでは、式典・講演会・シンポジウムで行われたプレゼンテーションや講演の要旨を紹介します。

札幌医科大学、100周年に向けた新ビジョンを発表 — 創基80周年を機に「Vision for the Next Decade」策定 —

札幌医科大学は、創基80周年の節目にあたる2025年、次の10年を見据えた新たなビジョン「札幌医科大学 Vision for the Next Decade」を策定。記念式典の中で、山下敏彦 理事長・学長がプレゼンテーションを行い、新ビジョンのお披露目を行いました。

次の100年へ向けた「新たな歩み」

山下学長は、「本学は80年にわたる歴史の中で、先達の尽力により、数々の医療実績と独自の気風・伝統を築いてきた。いま、100周年に向けた新たな歩みを始める」と語り、ビジョン策定の意義を説明。

このビジョンでは、札幌医大のあるべき姿と目指すべき方向性を明示しました。

「5つのKEY」で示す未来の姿

ビジョンの中核として、新しい時代への扉を開く「5つのKEY（キ）」、すなわち「機動力」「基盤」「希望」「気持ち」「絆」を掲げました。これらは、次の時代に札幌医科大学が果たすべき役割と使命を解き明かす「鍵（KEY）」となるものです。

これらの「KEY」を基本的コンセプトとして、「教育」「研究」「診療」「国際・社会連携」「ガバナンス」の5分野について、具体的なビジョンを示しています。



北海道、そして世界へつながる人材育成へ

山下学長は、「この取り組みにより、本学の学生、研修医と医師をはじめとする医療者、教職員は、多岐に渡る知識、技能、医療人としての熱いマインドを身に付けることができ、それは北海道の医療に貢献する人材、そして、グローバルに活躍する人材の育成へとつながっていきます」と新ビジョンを述べました。

希望に満ちた未来への出発

「札幌医科大学Vision for the Next Decade」は、建学の精神である「進取の精神と自由闊達な気風」「医学・医療の攻究と地域医療への貢献」を基盤とし、札幌医科大学がさらなる高みを目指すための道しるべとなるものです。明るい未来と、すべての人々の健康と幸福の実現を見据えた、希望に満ちた札幌医科大学の新たな挑戦が始まります。

記念講演

トップスポーツを支える 医科学の現状と課題

～札幌医科大学スポーツ医学講座開設に寄せて～

筑波大学体育系 教授
ソウル五輪女子柔道銅メダリスト（講道館女子7段）

山口 香氏

選手への心の奥底にあるものを気付かせたり、引き出ししたりするのがコーチングです。コーチは、自分の思いや意見を選手に無理やり押し付けてはいけません。一方的なコミュニケーションに終始してしまい、それだと選手は嫌になってしまいます。私は、スポーツドクターなどスポーツ医学にかかわる人たちが、このコーチングの考えを身に付ける必要があると感じています。「あしなさい。こうしなさい」と、自分が持っている答えを押し付けるのではなく、選手にとことん寄り添い、問いかけ、対話などコミュニケーションの中から一緒に答えを見つけ出したり、やる気を引き出したりすることが重要だと思います。

札幌医科大学は、2023年に全国の国公立大学として初めてとなる「スポーツ医学講座」を医学部に開設しています。非常に素晴らしい試みだと思います。「スポーツには世界を変える力がある。人々を勇気づける力がある。人々を結びつける力がある。希望をもたらす力がある」というのは、アパルトヘイト撤廃後の南アフリカで大統領となったネルソン・マンデラ氏の言葉です。スポーツはもちろん万能ではありませんが、スポーツだからできること、スポーツだから示せることは、確かにあります。札幌医科大学のスポーツ医学講座から、そういったスポーツの力を十分に理解し、活かしながら、トップアスリートの医学サポートなど日本のスポーツ界の発展を後押しできる人材が数多く輩出されることを期待しています。



現代のトップスポーツは、競技が高度化しています。例えば、フィギュアスケート。1種類でも4回転が跳べれば世界王者になれる時代はとうの昔に過ぎ去り、今やトックスケーターにとって4回転を何種類、何本跳ぶかは勝敗を左右する重要なポイントです。どの競技も先端に適応しなければ、世界には通用しません。競技の高度化は、簡単にいうと高強度・高頻度・長時間のトレーニングが可能にしていますが、重要なのは、選手の身体がそれらのトレーニングに耐えられるかどうかです。技を習熟する過程のトレーニングで身体へのケアを軽視すると、過剰な負荷がかかりけがや故障につながります。根性や精神論だけではだめで、選手の熱意と心身の限界を考えながら、けがや故障の予防・治療やアドバイスをするスポーツ医学、スポーツドクターの存在が非常に大切です。

現在のトップ選手たちを支えているのは、オーケストラに例えられるようなプロフェッショナル集団です。選手を中心に、技術コーチやメンタルコーチ、フィジカルコーチ、栄養担当、メカニック担当、アナリスト、そしてスポーツドクターなどさまざまな職種が一つのチームになって選手を支えます。オーケストラの奏でる音が、選手のパフォーマンスです。どこか一つが突出するのではなく、全体として上がっていかないといけない。それぞれがプロの仕事をして、一つのハーモニーをつくるのが、選手の最高のパフォーマンスを生み出します。＜奇跡の勝利＞という言葉がありますが、私たちがすれば奇跡ではなく、必然の勝利なのです。プロフェッショナル集団が入念に準備していたからこそ起きた奇跡であって、勝つべくして勝ったわけです。たまたま、偶然に勝てるほど甘い世界ではありません。

私の専門はコーチングです。コーチとは、もともと馬車を意味する言葉で、つまり選手やチームを馬車に寄せ、目的地まで運ぶ役割ということです。選手の話に耳を傾け、信頼関係を築きながら、自ら課題解決策を考えるように支援する役割で



式典では、競技ダンスのアマチュア日本人一を目指す同大医学部3年の大木大樹（おおきだいき）さん、風香（ふうか）さん（札幌市立大）の親子のペアが、節目を祝う華やかな踊りを披露し、会場からは割れんばかりの拍手が送られました。



シンポジウム

「世界に羽ばたく札幌医のつばさ」 —国際社会で活躍する札幌医大の卒業生—

講演

医療従事者の仕事を変える新たな潮流／ 変化する医療環境とキャリアの未来



長尾 正人氏

少子高齢化、医療政策の見直し、デジタル技術や国際化の進展により、医療を取り巻く環境は急速に変化しています。“医療・医師＝安定”ではなくなる時代が近づいており、これからの医療従事者は、今後は社会の変化に敏感に反応し、新たな領域で価値を創出する力が求められます。海外でのキャリアを選ばなくとも、外国人患者への対応やウェルネス分野への注力、AI技術の開発・運用など、グローバル化をチャンスと捉えて活躍できる医師など、日本の医療の枠組みにとどまらない「プラスα」の力が役に立ちます。今、この瞬間にも、世界のどこかで新しい技術が生まれ、革新的な治療法が開発され、国境を越えた医療連携が始まっています。変化を恐れずに、学び続ける力が大切です。

講演

黎明期から成熟期に至る移植医療を 現場最前線での経験から



岩城 裕一氏

1970年代後半、私が初めて渡米した当時の脳死ドナー腎移植の1年生着率は50%未満でしたが、今や90%を超えています。その進歩の最前線で、ポール・テラサキ先生、トーマス・スターツル先生という移植医療界の二人のレジェンドと研究を共にできたことは、私の最大の財産です。日本では臓器提供の環境整備はまだ十分とは言えませんが、北海道における臓器医療・移植医療は確実に広がりを見せています。移植でしか救えない命がある——新たな世代の移植医がリーダーとなって、北の大地からその医療をさらに前進させてほしいと願います。

講演

“世界一幸せな国”から考える 看護の創造性



久末 智実氏

幸福度世界一のフィンランドには「SISU（シス）」という、逆境を乗り越える力を意味する言葉があります。ただ頑張るのではなく、創造性を持って、何かを変えていくという考え方です。＜看護＞もそうですが、フィンランドにおける仕事やキャリアアップとは、自分の仕事に役立つ知識や技術を手に入れ、新しい自分の可能性を見出すことです。その大前提として、ワークライフバランスが保たれ、ウェルビーイングな生活ができることが重視されている点に大きな特徴があると感じます。多様で複雑な状況にある患者さんのケアは、看護の力だけでは解決できません。

未知の時代や危機に対して挑戦や対話、人生を楽しむ心を忘れず、「看護プラスα」を考慮できる創造的な人材が求められているように思います。

ビデオメッセージ

札幌医大を卒業後、さまざまな地域や病院で経験を積み、現在はアメリカ・ジョージア州にあるエモリー大学の救急部で、救急専門医として臨床と教育に携わっており、ジョージア州の災害医療チーム（DMAT）のメンバーでもあります。また、国境なき医師団日本会長として、医療資源の乏しい地域や紛争地における医療活動や人道援助活動にも取り組んでいます。

どんな場所においても変わらず心にあるのは、「札幌医大がすべての出発点」という思いです。医療の本質である「人に向き合う姿勢」を学んだ学生時代の学びが、今も私の支えです。進化する医療の中でも、札幌医大の理念「地域医療への貢献」と「先進医療の追求」は変わらず受け継がれ、未来を担う医療人を育て続けていくことを願っています。



中嶋 優子氏

